

平成19年度

# 第39回 越谷市民文化祭

平成19年11月22日(木)～25日(日)

10:00～19:00(最終日は18:00)

## 越谷市郷土研究会展示部門出品紹介

於 越谷コミュニティセンター 大ホールホワイエ



- ◇周りの10個の輪は、昭和29年11月3日に合併した十町村である二町八ヶ村(「越谷町」の誕生)をあらわす。  
 十町村とは、越ヶ谷町・大沢町・桜井村・新方村・増林村・大袋村・荻島村・出羽村・蒲生村・大相模村をさす。
- ◇中央部周りのデザインは、カタカナの『コ』を4個集めたもの。つまり、越谷の『越』(「コ4」)を意味する。
- ◇中心部のデザインは越谷の『谷』の文字を圖案化したものである。
- ◇昭和30年11月3日には、草加町に合併していた川柳村のうち、伊原、菱塚、上谷が越谷町に入る。
- ◇越谷町は、昭和33年11月3日に市に昇格し、越谷市となる。

## 第39回 市民文化祭

### 郷土研究の部・展示作品リスト

番号	題名	頁	出品者名	住所
1	大沢の娯楽の殿堂「東武劇場」	1	原田 民自	弥十郎
2	「東武劇場」の再現図始末記	2	三浦 栄市	北越谷一丁目
3	見田方の土手道決壊と人柱伝説	5	池田 仁	相模町二丁目
4	川柳地区の石仏	7	加藤 幸一	春日部市大枝
5	東武鉄道と北越谷	13	高崎 力	平方
6	越ヶ谷久伊豆神社の例大祭	14	田熊 吉広	東柳田町
7	昔ながらの味・越谷の郷土料理	15	増岡 武司	東越谷七丁目
8	増森特産の固定種「増森ミツバ」	16	山本 泰秀	増林二丁目

※右の展示作品や入会に関する問い合わせ先は、  
 NPO法人・越谷市郷土研究会の宮川 進(当会会長・電話及びFAX975-19139)  
 までお願いします。

# 1 大沢町の娯楽の殿堂「東武劇場」

原田民自

大正十四年(一九二五)、大沢町に、越ヶ谷・大沢唯一の娯楽殿堂との触れ込みで東武劇場が落成した。そして、昭和十二年(一九五七)八月の新聞によると、火事で焼け落ちたと報じられた。その間、三十二年間、東武劇場は越ヶ谷・大沢の人たちにとって越ヶ谷・大沢のシンボルであり、娯楽の殿堂であった。

東武劇場とはどのような施設だったのか、実際に利用された方にお話を聞いた。

東武劇場は大沢一丁目の新旧国道にはさまれた場所ので、周囲は立ち木でさえぎられていた。付属建物を含めると二〇〇坪程度。開設当初の客席は棧敷で、それが座席に代わり、最後は椅子になった。戦前、観客席の後方には、巡査らしき人物が客席の後方において、常に舞台で行われる催しの監視をしていたものだ。

昭和三十年ごろ、近所の大沢小学校では郊外活動の一環で生徒が先生に先導され学校から列となして東武劇場まで歩いて映画を見にでかけた。サーカスや手品も行われていたこともあった。それから察すると東武劇場は、地域の人々が楽しんだ芝居小屋であったわけで、宣伝文の通り「越ヶ谷・大

平成十七年春、大沢一丁目の地元の人、若い時から知り合いの人を中心に東武劇場を調べ始めた。調査のきっかけは、越谷市史の「劇場の出現」を見たからである。

三浦栄市

市史の発行が昭和五十二年五月、焼失の時から二十年の時が流れているが焼失年月もない。ただ「夏の暑い日であった」と当時の人は異口同音に答えていた。もし、東武劇場が健在ならば一年四カ月後の昭和三十三年十一月の市制誕生の祝賀会場になっていただろうと思う。焼失から今年は五十年になる。

私は、越谷在住六十年、現在、八十二歳になる。二十代の若い頃、大沢町青年団の素人芝居に裏方として手伝い、その時、経営者の助川さんを紹介された。鼻下黒々とした髭をたくわえた親切な人であった。もう一人、チンドン屋の長さん、おどけた足取りで町を行く、あとから子供達がチンドンに合わせて踊りながらついて行くのを何回か見ている。東武劇場の記憶に残る人はこのお二人だけで、劇場の位置は分かっていたが、大きさ、内部の詳細な様子など分からないことが多かった。

新聞記事の建坪を参考に、二百五十坪の劇場図面を作成、友人、知人の意見、見分を取り入れたが、調査を始めて二年の空白、息詰まってしまった。

平成十八年十二月、知人より斎藤一男さんの半生記「波瀾坂」中

沢の娯楽殿堂」といえよう。昭和初期には大沢の芸者達が舞台で横に六列になって「越ヶ谷音頭 御座ノ松踊」を踊る写真が残されていて、東武劇場の宣伝広告もある。

劇場の正面には大きく「東武劇場」と書かれてあった。劇場入口の「のぞき窓」に「切符もぎ」のおばさんがいた。その後、再建されることなく、火事の跡地は、昭和三十八年ごろまでは、基礎のコンクリートがむき出しで、子供たちの遊び場になっていた。



東武劇場は、昭和32年に火事で焼失した



【日本一の権七雄 越ヶ谷名所案内】昭和7年(1932)より

た、長谷川昇劇団の長谷川さんに連絡することができ、当時の劇場の様子を奥様を仲立ちにして聞く。さらに百歳を越えてもお元気な元「山本屋」のお上さん桑原さんから舞台の思い出などを聞く。記憶の確かさには驚いた。大沢生まれ大沢育ちの友人MさんとSさんからも聞く。

平成十九年五月十二日、大沢一丁目の知人から助川さんのお身内の方を紹介される。私より歳上の方で八十六歳、お元気で、記憶力の確かな方である。開口十二間、奥行き二十一間、建坪二百五十二坪の劇場再現図を見ていただいた。

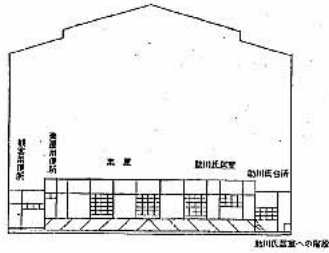
「三浦さん、劇場の大きさは二百坪前後だと思います。開口は十二、三間で奥行きが十五、六間だと思います」

私は焼失時の新聞記事にある二百五十坪にこだわりすぎていた。越谷消防署から大沢一丁目の一千五百分の一図のコピーを貰い、劇場のあった位置に縮小した二五〇坪の型紙を置いてみたが、収まらないはずであった。疑問が解けたのである。

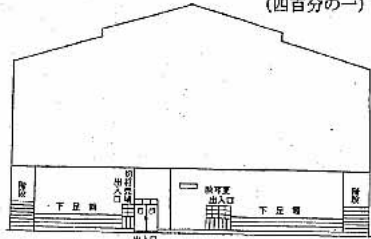
この聞き書きで、改めて再現図を作成した。

- ①「東武劇場の表側正面姿図」「東武劇場入口路地と商店」
- ②「東武劇場舞台客席1階展開図」
- ③「二階平面図」
- ④「二階観客席平面図」「舞台から見た観客席姿図」
- ⑤「裏手内側姿図」「舞台正面姿図」
- ⑥「建物正面の内側姿図」「裏手外側壁面姿図」
- ⑦「下手観客席姿図」「上手外側壁面姿図」
- ⑧「上手観客席姿図」「下手外側壁面姿図」

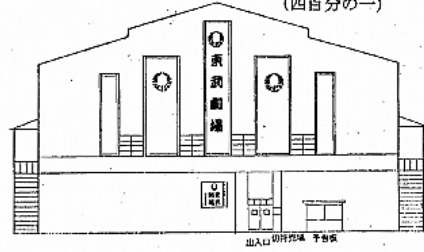
裏手内側姿図 (四百分の一)



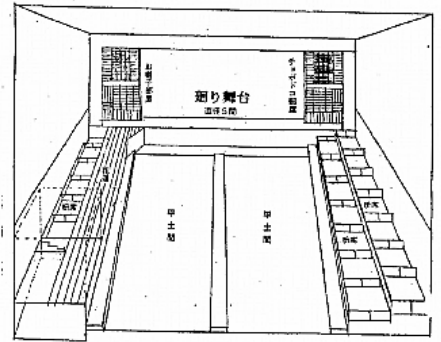
建物正面の内側姿図 (四百分の一)



京武劇場の表側正面姿図 (四百分の一)

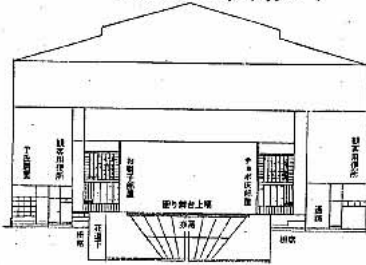


京武劇場舞台客席1階展開図

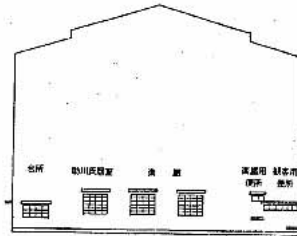


平成10年6月30日  
作成 三浦栄市

舞台正面姿図 (四百分の一)

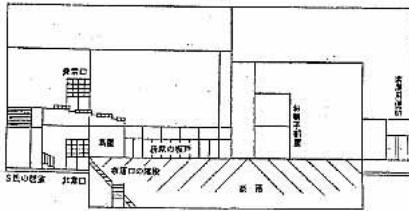


裏手外側壁面姿図 (四百分の一)

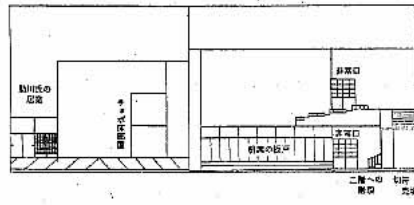


京武劇場入口階段と商店

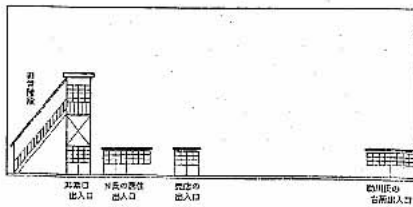
下手観客席姿図 (四百分の一)



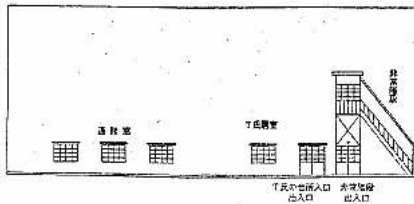
上手観客席姿図 (四百分の一)



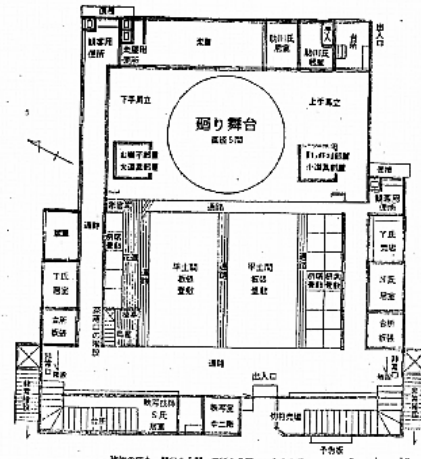
上手外側壁面姿図 (四百分の一)



下手外側壁面姿図 (四百分の一)

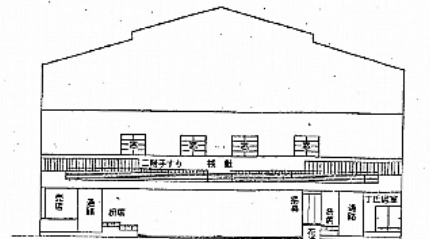
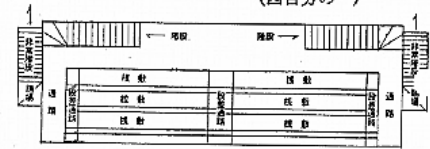


1階平面図 (四百分の一)



舞台の広さ 幅3.5間 奥行3.7間 22.5坪  
2階席 10間1.8間4人 1階席広さ3.04間  
2階席幅1.40間 合計4.60間  
入場観客数 520名

二階観客席平面図 (四百分の一)



舞台から見た観客席姿図

(四百分の一)

### 3 見田方の土手道決壊と人柱伝説

池田 仁

大洪水による土手道の決壊

天明六年（一七八六）の関東大洪水によって見田方（みたかた）にある元荒川の堤防を兼ねた土手道が決壊し、八坂神社の裏に内池が、観音寺の裏に内池と外池ができた。

八坂神社の裏では、土手道（堤防）決壊によって土手の内側（南側）に元荒川の水が入り込んで曲流し、ここ見田方村から隣の東方（ひがしかた）村にかけて広がる大きな沼となった。この内池には、地元の間でよく知られているオイテケ堀伝説がある。

一方、観音寺の裏に、元荒川から取水する堀（現、大成川）があるが、その堀の観音塚（かんのんいり）、土手の下などに礎を埋めて水の出入りを調節する水門）あたりの土手道が同様に決壊し、土手道の外側（河原側、北側）に外池が、土手道の内側（南側）に内池ができた。

外池には、人柱伝説の石塔「水龍大権現」が祀られていた。人柱伝説に関しては、地元でも知る人がほとんどいなくなってしまう。「水龍大権現」の石塔は、現在は外池だった西端のあたりに新たに植えられた松の木のもとにあり、大成町一―二九五の中村家が管理している。内池は大成町一―一五一の宇田家の東側の空き地となっている所で、弁天様が祀られていた。内池の弁天様のご神体は、高さ三―センチの板碑（主尊が梵字で表現された阿弥陀如来）の破片である。現在は八坂神社の境内に移されて祠の中に祀られている。

観音寺裏の外池の人柱伝説

人柱伝説について次に紹介する。天明六年（一七八六）、関東大洪水によって土手道の堤防が決壊してこのあたりが大被害をこうむった。その堤防の修復がなかなかできない。そこに二人の巡礼娘をつれた翁が通りかかり、聞く、「人柱を擲れば流入が止まる」と言われた。村人達の相談の上、その二人の生娘を承諾なしに無理やり人柱にすると流入を止めることができた。その巡礼娘を供養するために建てたといわれるのが「水龍大権現」の石塔である。

「水龍大権現」の石塔

次に、その石塔に刻まれた文字を紹介する。

「水龍大権現」文字塔（「越谷市金石資料集」に掲載なし）

所在地 見田方旧外池の西側端（大成町一―一七の土屋家の東側）  
石塔型式 角型（東向き・高さは中）  
年 号 不詳

「左側面」

「正面」

水龍大権現

「右側面」

（破損が激しく、文字の痕跡が全くない。）

越谷市史編纂室発行「越谷ふるさと散歩」(上)の八六頁によると、「左面」向かって左面の意味か」に、「子孫繁栄如意□□」と刻まれているという。

現在は破損のため判読不能となっている。

#### 八坂神社裏の内池の伝説

なお、八坂神社裏の内池には、「おいてけ堀伝説」の他にほとんど忘れられようとしている「白蛇伝説」があるので次に紹介をする。古くから内池に伝わる本来の伝説である。

天明六年（一七八六）の関東大洪水の時に、元荒川の堤防の決壊によってできた大きな沼があった。ここ見田方村から隣の東方村にかけて広がる沼であった。その大沼の名残が最近まであった「おいてけ堀」伝説が残る八坂神社の裏の内池である。現在は、新しくできた空堀があり、その中央に弁天様が祀られている。残念ながら当時の「おいてけ堀」の名残さえもなく、大きく変貌した。

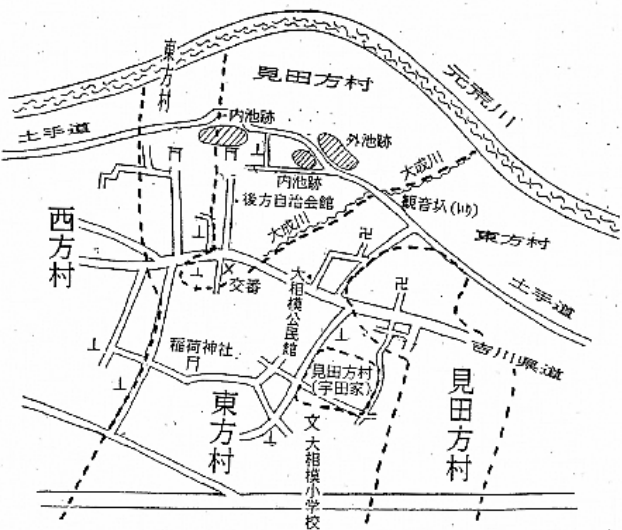
夕方から夜にかけてこの池のそばを通ると、その池のあたりから「置いてけ、置いてけ」と不気味な声が聞こえてくるので、手にしている物を置いて走り去ったという。

また、この沼（内池）にはもう一つの伝説がある（昭和十四年、中村徳二郎著「大相模郷土史」冊子より）。

この池の主はかなり大きな白蛇で、たまに通りがかる人を池の中に引き込んで、池の底に身を隠していたのであった。そこで地元の人々は、ここに水神宮と弁天を祀ることにした。すると、いつしか白蛇は出現することはなくなったという「白蛇」伝説である。

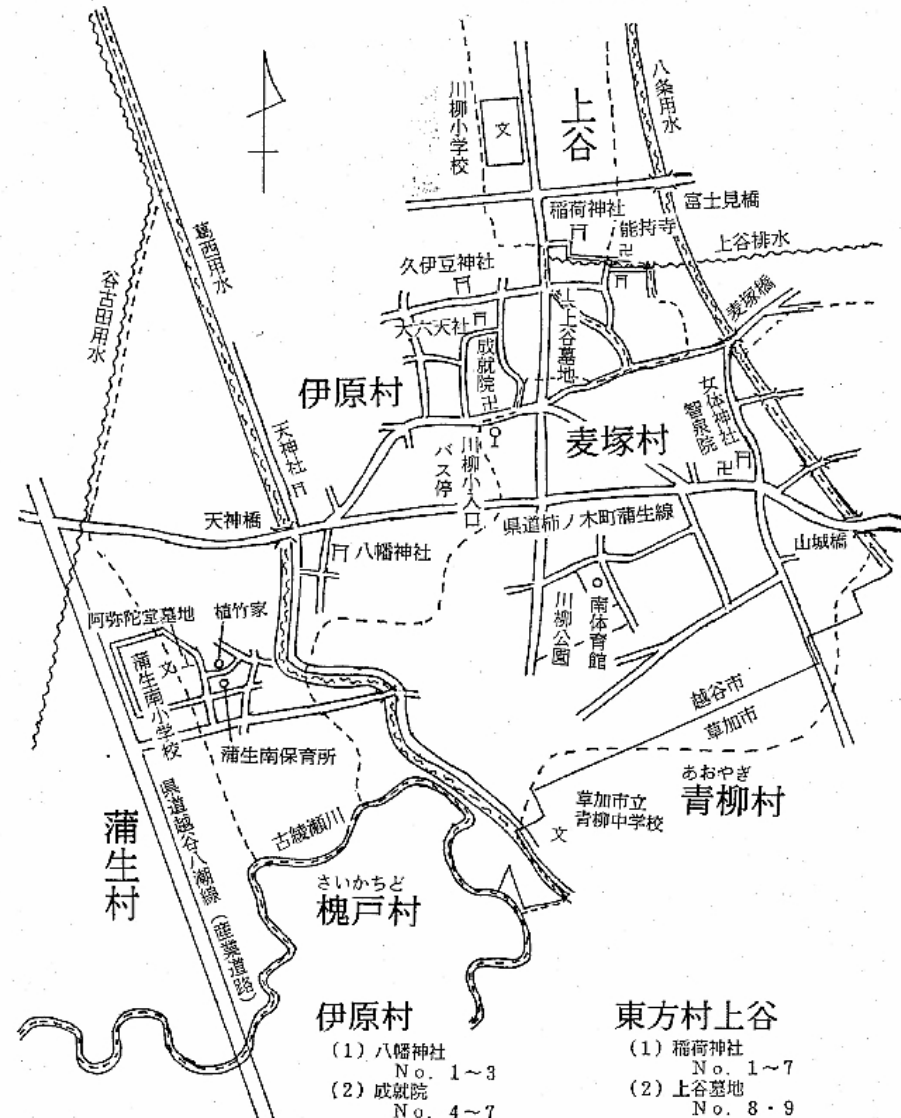
白蛇伝説については、大成町六―四五〇―一の宇田春吉氏（大正十五年の生）の談によると、次のような言い伝えもあるという。

ある日のこと。この沼で釣りをしていると、小さな蛇が池より出て来て足元に近寄る。いざ帰ろうとすると、足が重くなり動けない。そこに侍が通りかかる。釣りは助けを求め、侍は「目が大きな蛇だ、きっと相当大きな蛇に違いない」と言うや否や蛇を切りつける。蛇は本性を現し、大蛇となって池の中に逃げる。





# 川柳地区の石仏案内図



## 4 川柳地区の石仏

平成五年より市内平方地区から始めた石仏の系統調査が、今回の川柳地区で終了となる。川柳地区の調査の詳細な記録については、川柳町2丁目(旧伊原村)の成就院、川柳町5丁目の智泉院に資料を置かせていただいたので、請求(無料)願いたい。

市内の石仏調査をするきっかけとなったのは、平成三年から四年にかけて取り組んだ旧西方村地区の庚申塔に終わった調査である。この調査によって「越谷市金石資料集」に載っていた石仏資料に多くの誤りやかなりの漏れがあることに気付いたのである。

調査にあたっては、ただ単にどのような信仰の石仏塔であるかを知るだけでなく、そこに刻まれた文字の解読に力を注いだ。歴史の歴史を解明する上で、とても重要な基礎資料となるからである。

劣化した石に刻まれた傍かな文字の読み取りにはかなりの困難をとまとうが、細部までしっかりと読み取ることによって、正確なスケッチに心掛けた。

なお、今まで実施してきた石仏調査資料については、西方の大聖堂(大相模の不動様)内にある資料室(見学無料)、越谷市立図書館二階にも閲覧できる。

### 旧伊原村

(1) 八幡神社  
伊原村の伊原新田の鎮守である。かつては地蔵院と呼ばれる寺院があった所でもある。伊原村の本村は、「伊原本田」という。

図1は、三月、背面金剛、鬼が描かれた庚申塔である。その下にある「神中」と刻まれた白石は、この庚申塔の白石ではなく、隣にある馬頭観音(図2)の白石と思われる。図2は、武器である輪宝と鐙を持つので馬頭観音と思われる。頭上は風化してはつきりしないが、馬頭が祀られているのであろう。その下には、「三尊像」が刻まれた白石があるが、隣に「御嶽山(図1)の白石」と思われる。図3は、木曾御嶽三山供奉塔である。

三山とは、御嶽山を中心、八海山、三笠山をさす。八海山は、曹興行者が開いた新御嶽の八海山、三笠山は奈良中の三笠山にちなむ。原王大権現、提燈菩薩王、刀利天宮の三神は、江戸中期、木曾の御嶽山を開いた曹興行者が鎮めた神であるという。「清和天皇の三神不動明王」は不動明王をさし、その両脇には、不動明王の眷属である「童子」の名前が刻まれている。この石塔は、越谷市町一丁九一八の植竹家の御嶽山二代目先達である植竹利

加藤謙幸

平が、明治年間には遷したものである。

### (2) 成就院

「三郎送り大師」(西新井大師を一番とし、南足立郡、北足立郡、南埼玉郡の三郎にまたがる八十八カ所の弘法大師聖徳遷りの十四箇所の寺院である。十三番は麦塚の智泉院、十四番は蒲生の光明院である。

図4は、「御嶽山」文字塔である。石仏の上部に描かれた仏は、智泉院を指す大日如来像と思われる。図5は、俗に「般若座」と呼ばれる曹興の石塔である。図6は、地蔵菩薩の石仏である。江戸初期の寛文十三年(一六六三)、地元の人二十一人が生野の内に死後の冥福のために造立したものである。図7は、地蔵菩薩を信仰した三十三人の女性の講中が造立した地蔵菩薩の石仏である。

### (3) 久伊豆神社

久伊豆神社は、越谷川と元荒川にはさまれた地域に散在する神社である。この久伊豆神社は伊原村の鎮守となっている。

図8は、日月、背面金剛、鬼、三猿が描かれた一般的な庚申塔である。図9は、それに二匹の鶴が加わった庚申塔である。図10は二羽が見られる庚申塔であるが、鬼が三匹描かれているのは珍しい。

### (4) 大六天社

文化財に指定されている御の田田家(川柳町二二五一一)の南東には大六天社がある。図10は、そこに建つ石塔である。

(5) 植竹家(南町一九一八)跡内  
曹興の御嶽山の信仰を知る上で研究者にとっては貴重な石塔といえる。

ここに刻まれた曹興行者(一七三三―一八〇一)は、秩父の大滝村で生まれた江戸中期の修験者で、江戸時代末期には、彼の名前は大衆登山のカリスマ的な指導者として知られ、木曾の御嶽山の王滝口の閉居として有名である。その他、地元の秩父の御嶽山、越後の八海山、上州の武蔵山なども開いている。

図11は、江戸時代から東方村(現草加市)の曹興行者の信仰が東方村に受け継がれていたが、明治になると、東方とは遠隔地のため子供たちの通学や役

### 伊原村

- (1) 八幡神社 No. 1~3
- (2) 成就院 No. 4~7
- (3) 久伊豆神社 No. 8~10
- (4) 大六天社 No. 11
- (5) 植竹家(南町1-9-8) 参考1~4

### 東方村上谷

- (1) 稲荷神社 No. 1~7
- (2) 上谷墓地 No. 8-9

### 麦塚村

- (1) 智泉院 No. 1~10
- (2) 女体神社 No. 11-12

湯原の往復が不便であったことから、明治二十一年の町村合併で川柳村(旧・楠木村、伊原村、青柳村の地域)に仮編入した。さらに戦後の昭和二十五年の行政区域の変更により東方から離れて正式に編入し、川柳村に属するようになった。

(1) 稲荷神社

稲荷神社は、上谷の鎮守である。図1は、従来の庚申塔に「舊神」の文字が明治初期に刻み込まれたものである。

次に図1で触れた改刻審判塔について紹介をしよう。

「舊神」とは、疫病(伝染病)や悪霊(たたり)をすする死霊(シ)が侵入してくるのをきえさせる神である。明治元年の明治新政府による神仏分離の実施時に、(現、行田市)では、国字で復古神道を体系化した田圃圃の「庚申」と申すな、(舊神と唱えよ)との影響を受け、(舊神)と改刻する政策を推行了。こうして、仏教系庚申塔から神道系庚申塔への改刻による強硬変更が実施された。

恐瀆の飛び地である楠の木頭八村もその対象となり、八か村の一つである東方村に属する上谷でも実施されたのである。

図2も図1と同様に審判改刻塔である。図3は、女性の講中が造立した舊神塔である。

図4は、(杉)天皇を神とする「八幡大神」文字塔で、「やわたのおおみかみ」とも読む。

図5は、浅間神社の神をすすると思われる「平間」(浅間)「天祐」文字塔である。図6は、天照の神を祀る稲荷神供養塔である。図7は舊事に造立した木曾御嶽三山供養塔である。植竹寺四郎の名前が見られる。

(2) 上谷墓地

上谷墓地の北側に寺院があったと伝えられている。「普門院」と呼ばれる真言宗の寺院である。明治の臨仏殿契によって廃寺となったあと、墓地のみが早林家(川柳町五一七九一)の細地に移ってきたと伝えられている。これが現在の上谷墓地である。

図8と図9は、光明真言宗の塔である。石塔の上部に光明真言が梵字で刻まれている。

旧坂坂村

普門院(知泉院)は、天正年間(1573-1604)に若村谷棟(栗の中村右馬介)によって開基されたと伝えられる。その子孫が、江戸時代に若村村の世襲名主を勤めた中村家(川柳町四一四四五)

## 旧伊原村

1. 伊原 青面金剛像庚申塔



講中

4. 伊原 「湯殿山」文字塔



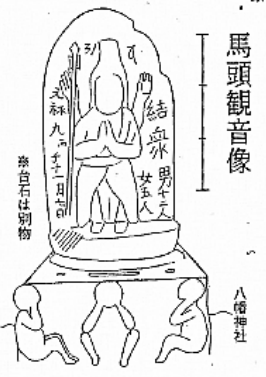
成教院

7. 伊原 地藏菩薩像



成教院

2. 伊原 馬頭観音像



5. 伊原 普門品文字塔



成教院

8. 伊原 青面金剛像庚申塔



久伊豆神社

3. 伊原 木曾御嶽三山供養塔



6. 伊原 地藏菩薩像



成教院

9. 伊原 青面金剛像庚申塔



久伊豆神社

である。

「三神送り大師」の十三番の寺院である。十二番は青柳の東賢寺、十四番は伊原の成教院である。

図1は、(結界石)である。「(聖)酒肉、(門)内に入るを許さず」と読む。寺院の門前で見られる。聖とは、ニラ、ニンニク、ネギなどの臭気の強い食べ物。辛とは、カラシ、トウガラシなどの辛みのある食べ物。これら(聖)酒肉は、精力がつくと言われる。俗人が寺院内に持ち込むのを禁止し、その清浄な寺院と俗世間との禁止した境目を結果としてとらえていた。図2は、地藏像付き(十六部廻り)の石塔である。日本全国の六十六箇所の霊場を回り、大蔵妙典(金経)の一部ずつ納めあげた記念に造立したものである。図3・4・8・9は、青面金剛像(日月)と、三環などが刻まれた庚申塔である。

図5は、「光明真言」と書かれた供養塔である。図6は、日蓮宗の題目である「南無妙法蓮華経」と刻まれた石塔である。図7は、百観音供養塔である。「百観音」は、西国三十三箇所、坂東三十三箇所、秩父三十四箇所すべての観音札所を併せた百箇所の観音をさしている。百箇所の観音像を立立奉納して参拝すると百観音を巡拝したのと同じ功德が得られるとされていたのである。図10は、道しるべを兼ねた馬頭観音供養塔である。石仏の正面には、「江戸三ツリ、そうか一ツリ」(両側面には「よし川一ツリ」)「こしがや一ツリ」と刻まれている。もとは、現在の川柳町五一二五五-四のコンビニエンスショップの両側路傍にあった。現在は、女性神社の弁天様を祀る池側に近い墓地の片隅に移されている。

(2) 女性神社

女性神社は、若村村の鎮守である。筑波山の女性神社から勧請されたと伝えられる三姉妹の女性像の一つで、今でも地元では筑波儀が続けられ、毎年四月に筑波山神社に代参している。

三姉妹とは、楠(木村)東漸院の女性像、篠栗村(現、草加市井天町)東正寺の女性像、それに若村村稲泉院の女性像のことである。図11は、池の中の島にある弁財天の祠のそばに建てられている石塔である。図12は、道しるべが刻まれた舊神塔である。二つに割れて無造作に置かれているが、この地帯の貴重な道しるべであった。正面には「早加え一ツリ」、側面には「なりたるみち、かきのきわたし十八丁」「大きかみち二十八丁、よし川みち一ツリ」と刻まれている。

図13は、(結界石)である。「(聖)酒肉、(門)内に入るを許さず」と読む。寺院の門前で見られる。聖とは、ニラ、ニンニク、ネギなどの臭気の強い食べ物。辛とは、カラシ、トウガラシなどの辛みのある食べ物。これら(聖)酒肉は、精力がつくと言われる。俗人が寺院内に持ち込むのを禁止し、その清浄な寺院と俗世間との禁止した境目を結果としてとらえていた。図2は、地藏像付き(十六部廻り)の石塔である。日本全国の六十六箇所の霊場を回り、大蔵妙典(金経)の一部ずつ納めあげた記念に造立したものである。図3・4・8・9は、青面金剛像(日月)と、三環などが刻まれた庚申塔である。

図5は、「光明真言」と書かれた供養塔である。図6は、日蓮宗の題目である「南無妙法蓮華経」と刻まれた石塔である。図7は、百観音供養塔である。「百観音」は、西国三十三箇所、坂東三十三箇所、秩父三十四箇所すべての観音札所を併せた百箇所の観音をさしている。百箇所の観音像を立立奉納して参拝すると百観音を巡拝したのと同じ功德が得られるとされていたのである。図10は、道しるべを兼ねた馬頭観音供養塔である。石仏の正面には、「江戸三ツリ、そうか一ツリ」(両側面には「よし川一ツリ」)「こしがや一ツリ」と刻まれている。もとは、現在の川柳町五一二五五-四のコンビニエンスショップの両側路傍にあった。現在は、女性神社の弁天様を祀る池側に近い墓地の片隅に移されている。

(2) 女性神社

女性神社は、若村村の鎮守である。筑波山の女性神社から勧請されたと伝えられる三姉妹の女性像の一つで、今でも地元では筑波儀が続けられ、毎年四月に筑波山神社に代参している。

三姉妹とは、楠(木村)東漸院の女性像、篠栗村(現、草加市井天町)東正寺の女性像、それに若村村稲泉院の女性像のことである。図11は、池の中の島にある弁財天の祠のそばに建てられている石塔である。図12は、道しるべが刻まれた舊神塔である。二つに割れて無造作に置かれているが、この地帯の貴重な道しるべであった。正面には「早加え一ツリ」、側面には「なりたるみち、かきのきわたし十八丁」「大きかみち二十八丁、よし川みち一ツリ」と刻まれている。

図13は、(結界石)である。「(聖)酒肉、(門)内に入るを許さず」と読む。寺院の門前で見られる。聖とは、ニラ、ニンニク、ネギなどの臭気の強い食べ物。辛とは、カラシ、トウガラシなどの辛みのある食べ物。これら(聖)酒肉は、精力がつくと言われる。俗人が寺院内に持ち込むのを禁止し、その清浄な寺院と俗世間との禁止した境目を結果としてとらえていた。図2は、地藏像付き(十六部廻り)の石塔である。日本全国の六十六箇所の霊場を回り、大蔵妙典(金経)の一部ずつ納めあげた記念に造立したものである。図3・4・8・9は、青面金剛像(日月)と、三環などが刻まれた庚申塔である。

図5は、「光明真言」と書かれた供養塔である。図6は、日蓮宗の題目である「南無妙法蓮華経」と刻まれた石塔である。図7は、百観音供養塔である。「百観音」は、西国三十三箇所、坂東三十三箇所、秩父三十四箇所すべての観音札所を併せた百箇所の観音をさしている。百箇所の観音像を立立奉納して参拝すると百観音を巡拝したのと同じ功德が得られるとされていたのである。図10は、道しるべを兼ねた馬頭観音供養塔である。石仏の正面には、「江戸三ツリ、そうか一ツリ」(両側面には「よし川一ツリ」)「こしがや一ツリ」と刻まれている。もとは、現在の川柳町五一二五五-四のコンビニエンスショップの両側路傍にあった。現在は、女性神社の弁天様を祀る池側に近い墓地の片隅に移されている。

(2) 女性神社

女性神社は、若村村の鎮守である。筑波山の女性神社から勧請されたと伝えられる三姉妹の女性像の一つで、今でも地元では筑波儀が続けられ、毎年四月に筑波山神社に代参している。

10 青面金剛像庚申塔 久留神社そば



11 木曾御嶽山供養塔 植竹家(南町一十九八) 郡内



11 「稻荷大明神」文字塔 大穴神社



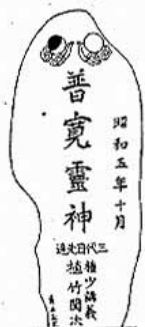
12 木曾御嶽山供養塔 「(参考2)」



4 木曾御嶽山供養塔 植竹家(南町一十九八) 郡内



4 木曾御嶽山供養塔 「(参考4)」



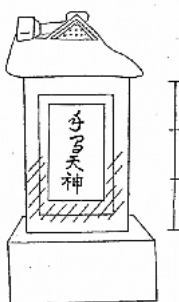
4 「八幡大神」文字塔 稲荷神社



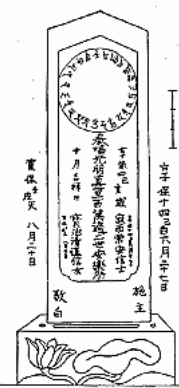
7 木曾御嶽三山供養塔 稲荷神社



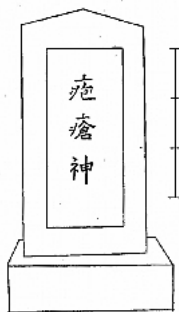
5 「浅間天神」文字塔 稲荷神社



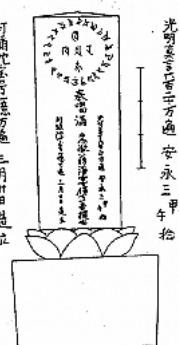
8 光明真言曼陀羅塔 上宮聖地



6 疱瘡神供養塔 稲荷神社



9 光明真言曼陀羅塔 上宮聖地



1 旧東方村上谷 うわや

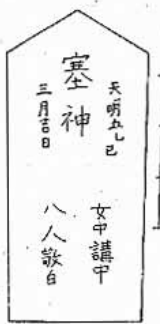
1 塞神改刻・青面金剛像庚申塔 稲荷神社



2 塞神改刻・青面金剛像庚申塔 稲荷神社

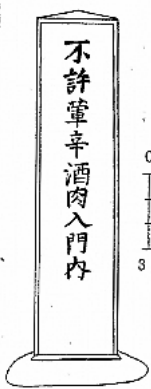


3 塞神塔 稲荷神社



1 旧麦塚村

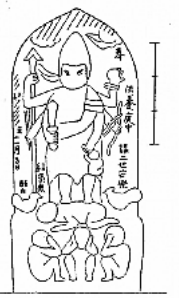
1 結界石 菅原院の門前



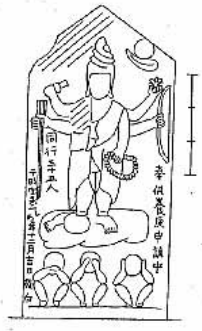
2 地藏像付き六十六部廻国塔 稲荷院



3 青面金剛像庚申塔 稲荷院



4. 青面金剛像庚申塔  
習志院



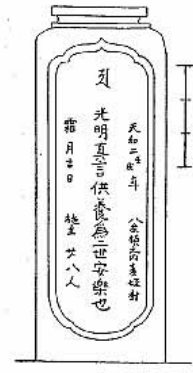
7. 百観音供養塔  
習志院



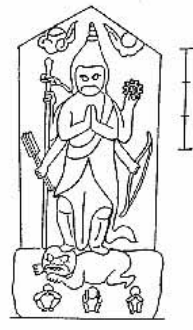
10. 道標付き馬頭観音供養塔  
習志院



5. 光明真言供養塔  
習志院



8. 青面金剛像庚申塔  
習志院



11. 弁財天奉納石燈籠供養塔  
女体神社



6. 題目塔  
習志院



9. 青面金剛像庚申塔  
習志院



12. 道標付き塞神塔  
女体神社



### 5 東武鉄道と北越谷

東武鉄道は、その開設出願理由として関東北部（足利・伊勢崎・桐生方面）の繊維製品を東京湾に運び、海外へ輸出するための輸送であるとしている。当初の目的地を足利にしていることから、うなすけられる。

高崎 力

明治三十一年（一八九八）十一月十日、東武鉄道会社は大沢町北端に技術部出張所を設置した。これにはいくつかの理由がある。当初の開通区間は北千住・久喜間であり、レールの敷設工事をする場合に、ほぼその中程の大沢町から南北二方面（同時に工事を進めることにより、工期が短縮することができる。多数の技術者・工事人を受容する宿泊施設として日光道中の旅籠屋がある。実際に旅籠屋を利用していったという事実は、明治三十二年二月、越ヶ谷町の殆どを焼き尽くした「芋金火事」に際し、いち早く消火活動に参加したのは東武鉄道の工事人集団であったことからもわかる。後に埼玉県等から感謝状を受けている。当時の幹線道路は日光道しがなく、その幹線道路は大沢町を縦断していたので陸上輸送に便利であった。さらに元荒川が近くを流れており、水上輸送も可能であった。あらゆる角度から検討して大沢町が最適であって、鉄道開通後は技術部出張所を「越ヶ谷停車場」として転用するなど工事費削減に大いに効果があった。

越ヶ谷停車場（現在の「北越谷駅」）が開業すると、駅前には運送

店や乗合馬車（後に乗合自動車）、待合茶屋などが出現し、大沢町を通過する北はすれに越ヶ谷停車場を利用する越ヶ谷町民にとっては苦痛であった。そこで、越ヶ谷町役場では、

- 一、当町は、東武鉄道（株）に停車場設置費用として一万六千円を寄付する。
- 一、停車場と日光道を結ぶ幅四間（七メートル強）以上の道路を町で新設する。
- 一、商工業者には、東武鉄道（株）と貨物運送の契約を締結させる。

などの数項目を提案したが、越ヶ谷町民の負担は大変なものであった。その結果、大正九年（一九二〇）四月十七日には、越ヶ谷停車場が現在の越谷駅の地点に開業し、大沢町にあった停車場は、「武州大沢駅」と改称した。大沢の地名が日光方面（野州）にも見られるので武州と誤に付けたのである。さらに昭和二十一年（一九五〇）十二月一日に「北越谷駅」と改称し、今日に至っている。

なお、明治四十一年十二月には、大林（現在の越谷市大林）の水田等を買上げて宮内庁埼玉御親場が開場して以来、皇族や外国要人が武州大沢駅に乗降車するため、武州大沢駅には特別休憩室等を設けたので、東武線各駅の駅舎とは異なるハイカラさがあった。



## 6 越ヶ谷久伊豆神社の例大祭

田熊吉広

氏子主催・主導による山車が出る例大祭は、地元の「マチック」の間では、親しみを込めて「サイジン様（祭神様の意味か）のお祭り」と呼んでいる。また終戦直後に莫大な費用をかけて盛大に開催された例大祭が新聞紙上に「一〇〇万円のばか祭り」として取り上げられ、以後、俗称「越ヶ谷のばか祭り」としても知られるようになった。

毎年九月二十八日に神社主催の例祭が神職により社殿において厳かに執り行われるが、氏子主催の「サイジン様のお祭り」は、その後にはしか実施できないのである。近年は、二・三年おきの十月に二日間実施されている。

初日は、御神霊を越ヶ谷の町中にお迎えする「神輿渡御」（みこしとぎよ）から始まる。

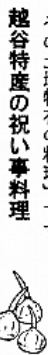
早朝、社殿において鳳輦（ほうれん、屋根の上に鳳凰をつけた乗り物）への御霊入れが行われ、御神霊が鳳輦によって町中へお出ましになるのである。鳳輦（神輿）行列の先頭には、「たっつけ袴」（カルサン）に「草鞋（わらじ）」姿の手には「ジャラン棒」と俗称される金棒を持った「お祭りこ（娘の意味か）」と称される二名の若い女性となり、

## 7 昔ながらの味・越谷の郷土料理

増岡武司

昔ながらの調理方法や味。そこには、その土地で作られた農作物、自然の恵みを利用した郷土色豊かな料理があります。ふるさとの味、越谷の郷土料理を紹介します。

昔は、「自給自足」の社会でした。必要なものは、自分で作り、自分で使うことを原則とした生活でした。副食は勿論のこと、味噌や醤油などの調味料に至るまで、自分の手で作ったものでした。そして、そこにはその地方独特の料理があり、今もなお残されています。それが「郷土料理」です。「郷土料理」は、「その地域の中で、作り、食べ、伝承されてきた、その土地特有の料理」です。



越谷のくわいは、収穫量と品質が日本一と言われています。

このくわいは、「体の割りに大きな芽が出る」と言われ、やがて芽が出るようにと願いが込められる縁起物です。正月のおせち料理やキントン、寄せ鍋の材料、くわいチップなど調理方法も多くなっています。

「縁起物のくわい」と言われるように、「物日（ものひ）」と言っておめでたいときや祝いごとがあるときには、必ずこのくわいを使った「くわいの含め煮」が出されていました。

「くわいの含め煮」は、その土地でできた農産物を生かした越谷の代表的な郷土料理です。

その後「越ヶ谷の木遣唄（きやりうた）」を歌う年番青年会のメンバーが続き、そして最後には概ね三百から四百名程の多人数にふくれあがる。旧来から変わらない古代絵巻さながらの鳳輦行列が見所である。鳳輦の担ぎ手は、昔から四丁野（しちようの、現在の宮本町）の氏子に限られている。

一方、山車（だし）の引き回しは、旧越ヶ谷の日光街道沿いの八ヶ町（本町一、二、三、中町、新石一、二、三、弥生町）から一台ずつ出されて行われる。ここでも「越ヶ谷の木遣唄」が聞かれる。向きを変えるときが見所で、職の方が山車の旋回をする。各山車の最上段についている人形は次のとおりである。

本町壱は龍神、本町貳は楠正成、本町参は素戔嗚尊（すさのおのみこと）、中町は鍾馗、新石（しんこく）壱は神武天皇、新石貳は鍾馗（本来は神功皇后）、新石参は武蔵坊弁慶（本来は猩猩、しようじょう）、弥生町は日本武尊（やまとたけるのみこと）

昔の山車は三層構造でかなりの高さだったが、電話線の架設にともなうて、今では七台が二層に改装された。

### 【ねぎた（にじた）】 客をもてなす人寄せ料理

「ねぎた」と言う料理は、越谷の特産品であるねぎを使用した郷土料理です。「た（にじた）」の意味は、豆腐や黒豆と一緒に混ぜ合わせた食べ物だからと言われています。この「ねぎた」は、主に人寄せなどの料理として、昔からこの家でも作られていた料理でした。特にねぎに甘味が出ておいしくなる冬の時期、お客様をもてなす料理でした。



### 【すみっかり】 農村行事に供える常備食

「すみっかり」と言う料理は、甘酒、お神酒などと一緒に初午（はつうま）の日に神社に供える食べ物で、甘酢に浸した大根おろしの中に、節分に使った大豆を入れたものです。

初午とは、二月に入って初めての午の日のことです。昔は、市内のあちこちで、この初午の行事を盛大に行うのがならわしでした。

### 【具汁（じじる）】 大豆を使ったスタミナ食

この料理、実は大豆を水につけて、やわらかくし、生のままで丹念にすりつぶした「豆汁」を入れた味噌汁のことです。越谷では、昔は農作物として大豆がたくさん生産されていたことから、具汁が作られていました。具汁を作るとき、具（豆汁）を最初に入れる人がいたり、最後に入れる人もいるなど、地域によっては作り方や味付けが違います。



大豆は畑の牛肉と言われるように、植物性たんぱく質が高い食べ物です。栄養満点のスタミナ郷土料理と言えます。

※本文作成にあたっては越谷市広報広聴課にご協力いただきました。

# 越谷市郷土研究会に入ってみませんか！

## NPO法人・越谷市郷土研究会とは

(平成19年10月現在)

◎史跡めぐりなどのイベントを毎月実施、毎年、越谷市民まつり・越谷市民文化祭・こしがや文化芸術祭に展示部門で参加しております。

◎当会は、昭和40年(1965)3月に発足し、平成16年にNPO法人になりました。現在は会員数が300名を越える大所帯です。

ほぼ毎月行われる史跡めぐりは371回を数えるまでになりました。

◎当会の最近の主なイベントをあげますと次のとおりです。

平成18年 8月26日(土) 見田方遺跡発掘40周年記念講演会(越谷郷土研究会の共催)

平成18年 9月30日(土) 鹿沼：絢爛の彫刻屋台と川上澄生美術館を訪ねる

平成18年10月 9日(月) 大間野・旧中村家のイベント(越谷郷土研究会の共催)

「昔懐かし！とうかんやのわらでっぼう」

平成18年10月28日(日) 今も残る田園風景「野島・三野宮」を訪ねる

平成18年11月 5日(日) 埼玉のお神楽をみよう・さいたま芸術劇場芸能公演

平成18年11月14日(火) 大間野の旧中村家保存民家開館2周年記念イベント

「昔の遊びで遊んでみよう！」

平成18年11月28日(火) バス史跡巡り：伊勢原と大山参り

平成18年12月11日(月) 建長寺で座禅体験そして初冬の北鎌倉を訪ねる

平成19年 1月 3日(土) 日本橋七福神めぐり

平成19年 1月28日(日) 歴史講演会「画家・斎藤豊作 越谷の里へ」(越谷郷土研究会の共催)

平成19年 2月10日(土) 春を待つ神明・西新井を訪ねる

平成19年 2月17日(土) 大間野・旧中村家のイベント(越谷郷土研究会の共催)

「親子で作ろう！かわいなおひなさま」

平成19年 3月30日(金) バス史跡巡り：岩宿遺跡、国定忠治の墓、三日月村

平成19年 4月24日(火) 埼玉鴨場見学と「ほっと越谷」での男女共生参画の話題

平成19年 4月27日(金) 醤油がつくった野田の文化と歴史散歩

平成19年 5月19日(土) 蒲生から平和橋までの散策、蒲生一里塚、葛西親水緑道

平成19年 6月 9日(土) 江戸情緒の佃島と文明開化の築地を訪ねる

平成19年 6月24日(日) 映像でみる「懐かし越谷」

平成19年 7月24日(火) 川口・SKIPシティ(アーカイブス)見学

平成19年 7月26日～8月6日 越谷市立図書館「日本一の力持・三ノ宮卯之助」展

平成19年 8月25日(土) 講演会「生誕二百年・三ノ宮卯之助」(越谷郷土研究会の共催)

平成19年 9月29日(土) ロマン漂う行田：足袋とくらしの博物館、忍城博物館

平成19年10月24日(水) バス史跡巡り：妙義神社、碓氷峠と鉄道文化村

◎会報「古志賀谷」の隔年の発行(B5版、百十～百五十頁程度)及び無料配布(会員) ※なお、以上の他に、越谷市社会福祉協議会への寄付・文化財パトロールの活動なども行っております。また、学校や自治会、各団体などへの出前授業も承っております。

## 郷土研究会にお入りになるには

◎会費は、年間2千円(4月～翌年3月、会報・諸案内状・諸会議費等)です。どなたでも気楽に入会できます。市外の方でも歓迎致します。

◎申し込みは、はがきに「平成何年度より入会」とお書きのうえ、住所・氏名・電話番号をご記入し、下記までお寄せ下さい。または当会の各種行事の際にお申し込み下さい。

☎343-0041 越谷市 千間台西 2-17-16 宮川 進方

NPO法人・越谷市郷土研究会

☎048-975-9139

事務所：旧日光街道沿いにある越谷産業会館の道路斜め反対側、チャレンジショップ「夢空感(ゆめぞらみ)」内にあります。

## 8 増森特産の固定種「増森ミツバ」

山本 泰秀

ミツバとは、日陰に生え、強い独特な香りがあるセリ科の多年草である。日本列島では、北海道から沖縄まで野生し、中国大陸・韓国・北朝鮮や北米大陸にも分布する。日本産のミツバはその亜種とされているが、古来よりわが国では、湿地や陰地など至るところに自生が認められていることから、亜種ではなく日本原産であることは明らかであろう。

固定種とは、何世代もかけて選抜淘汰が行われ、遺伝的に安定した品種をいう。一方、F1品種は、自家受精して採種した種子である固定種とは違って、雄と雌を交雑させて採種した種子のことである。固定種の作物の例としては、ミツバの他に、レタス・ゴボウ・春菊があげられる。選抜する人や選抜地の気候・風土によって採種を続けると変化してしまうという特徴がある。なお固定種でも、ある地方で昔から選抜されてきた品種を「在来種」と呼ぶことがある。

ミツバの栽培技術は江戸を中心に発達したようで、現在の東京都葛飾区水元や堀切(旧・下千葉村)近辺では、享保年間(一七二〇年頃)に栽培が始まり、天保年間(一八三五年頃)には、苗床に覆いをして醸成する醸熟物を利用した早出し栽培が行われるようになった。また糸ミツバは、堀切(下千葉)付近では古くから栽培され、安政年間(一八四五年頃)には、下千葉産の糸ミツバとして千住市場に盛んに出荷されていたと伝えられている。

その後、ミツバの産地は、千葉県松戸市及び神奈川県埼玉県に移った。江戸時代から代々引き継がれてきたミツバ栽培は、昭和初期に越谷市内の増森(ましろ)地区で再び盛んになり、増森特産の固定種「晩抽(ばんしゅ)増森ミツバ」及び「増森白茎(しろくき)糸ミツバ」が栽培された。そのうち晩抽増森ミツバは、現在も、野田市にある種苗(しゅびょう)会社、さいたま市見沼区にある種苗会社を通じて、関東はもとより、北は東北・北海道、南は九州まで全国的に「増森ミツバ」として販売されるようになっていく。

晩抽増森ミツバは、それまでの増森産の中の抽台(植物の花茎が節

間の伸長によって急に伸びること)の遅い系統を選択固定した品種で、特に東北・北海道地方での栽培に適している。秋から翌春にかけて出荷する軟化栽培に適し、伏せ込み後の発芽が一斉に揃って伸長するものが特徴である。増森白茎系ミツバより茎の伸びがよく、葉もやや大きいが、高温時の出荷以外は、根ミツバ・青ミツバのいずれの栽培にも可能である。

一般に、ミツバの種子はやや偏平の線状か長楕円で、黒褐色、縦に浅い筋が入っている。採種は八月で、六十センチに徒長したミツバの刈り取り時期は、種子が五から八割落下した時点で乾燥に適している。この時期がよい。乾燥し過ぎると発芽しにくい。乾燥の方法は、ミツバを七・八本に束ねて軒下に立て掛け、日陰で乾燥させるやり方である。

ミツバは、笹竹と同様に所々に種を付ける。乾燥したミツバは、新聞紙の上やゴザの上で手もみや足でこすり、それから箕であおって種を分離する。二テシットル(一合)の種を採種するには、十束のミツバが必要で、四万から六万粒の数になる。十アール(一反)当たり、百から百五十リットル程採れるのが常である。

主な参考文献

「農業技術大系・第11巻」(農産漁村文化協会)  
「種苗60年」(渡辺安賢著)